

NEWS LETTER

Contents

- ・ 会長挨拶
- ・ 小村寿太郎記念館での展示会を振り返って
- ・ 展示会と富塚一彦先生講演の感想
- ・ ホームステイ事業報告
- ・ 記念館も姉妹都市も
- ・ 年間活動実施報告

2025
春季号

VOL.15

ごあいさつ

「アカセキレイ」

一般社団法人
小村寿太郎侯東京奉賛会
会長 下 苮 直 樹

年が明け、令和7年、2025年に改まって早や1か月、2月1日（土）に、当一般社団法人小村寿太郎侯東京奉賛会の役員会・新年会が開かれた。冒頭、年頭の挨拶という程のものではないが、その中で、小村寿太郎と言えば、何とんでも「外交」なので、ある新聞の「論壇」の記事を紹介した。それは、元駐米大使・日米協会藤崎一郎会長の主張である。氏はトランプ第1期政権時の駐米大使として知られているところであるが、今まさに、バイデン政権に代わって誕生したばかりの第2次トランプ政権は、FLOOD THE ZONE（情報洪水）と言われる手法で、関税、領土等、いきなり世界を混沌とさせんばかりのスタートを切った。氏は、「日本は（この政権に）どう向き合うか」という自問に「国の軸は維持しながら柔軟に」

と自答している。この国の軸の基本が、「日本は安全、確実、清潔、規律、礼節という面で世界で群を抜いている」ところであるというのだ。「頭文字をとって私は“アカセキレイ”と呼んでいる」と。私達は、この「アカセキレイ」を誇りとしたいものである。

ところで、思い起こすのは、ポーツマス条約の締結に至る苦節の過程で、小村・ウィッテの身を削る交渉ながらも暗礁に乗り上げ、決裂寸前に到った際のことである。セオドア・ルーズベルト大統領が果たした仲介の労は偉大な功績であった。

今こそまた同様に、トランプ大統領にもロシアとウクライナの間に入って、難しい局面ではあるが、公正な仲介の労を大いに期待したいところである。

小村寿太郎記念館での展示会を振り返って

外務省日本外交文書編纂室長 富塚一彦

令和6（2024）年11月2日から12月1日まで、日南市飢肥の小村寿太郎記念館において、外務省外交史料館と小村寿太郎侯奉賛会による連携展示「小村寿太郎とポーツマス条約」を開催しました。

小村侯の関係史料を郷里宮崎の方々に原本でお目にかきたいと常々考えていましたが、令和6年は日露戦争開戦から120年の節目の年に当たることから、この機会に企画を実現しようと令和5年秋に宮崎県庁などを往訪し、連携展示の可能性について意見交換を行いました。その結果、とりわけ熱心に話を聞いてくださった小村寿太郎記念館が、展示会の開催先として最適であると考えました。そこでさらに調整を重ね、日南市飢肥において大規模な文化・芸術イベントが予定される11月に、小村寿太郎記念館で展示会を開催する運びとなりました。

来場者からは「原本が残っていることにびっくり」、「歴史の教科書に載っている人のサインを見ることができて感動した」などの感想が寄せられました。また地元の飢肥中学校では「この機会にぜひ本物を見せたい」との学校の意向で、授業時の見学会が実施されました。教科書で知っていても、実物を直に目にするインパクトは全く違います。原本を通じて若い人たちの心に、郷里の偉人の活躍が深く刻まれたことと思います。

また会期中の11月23日には、小村寿太郎記念館の大会議室において展示会の関連イベントとして、「外交史料にみる小村寿太郎—外交活動とその功績—」と題する講演会が開催されました。冒頭で高橋透日南市長が挨拶され、令和7年はポーツマス条約締結120年、小村侯生誕170年、日南市とポーツマス市との姉妹都市締結40年に当たることから、日南市では記念イベ

ントの実施を検討しているところ、今回の展示会をそのプレイベントと位置づけ、来年に向けた盛り上がりのきっかけとなることを期待する旨が述べられました。講演は私が担当し、小村侯が外務省に入省してから病没するまでの外交活動の足跡を辿る形で、外交史料館が所蔵する関連史料を紹介しました。140名ほどの参加者からは多くの質問が寄せられ、地元宮崎の小村侯に対する関心の高さがうかがわれました。

最後になりましたが、今回の連携展示会開催に当たっては、東京奉賛会をはじめ、日南市役所、日南市教育委員会、飢肥城下町保存会、城下町飢肥まちづくり協議会、飢肥地区自治会の皆様から、多大のご協力を賜りました。ここに厚く感謝の意を表します。

最後にになりましたが、今回の連携展示会開催に当たっては、東京奉賛会をはじめ、日南市役所、日南市教育委員会、飢肥城下町保存会、城下町飢肥まちづくり協議会、飢肥地区自治会の皆様から、多大のご協力を賜りました。ここに厚く感謝の意を表します。

最後にになりましたが、今回の連携展示会開催に当たっては、東京奉賛会をはじめ、日南市役所、日南市教育委員会、飢肥城下町保存会、城下町飢肥まちづくり協議会、飢肥地区自治会の皆様から、多大のご協力を賜りました。ここに厚く感謝の意を表します。



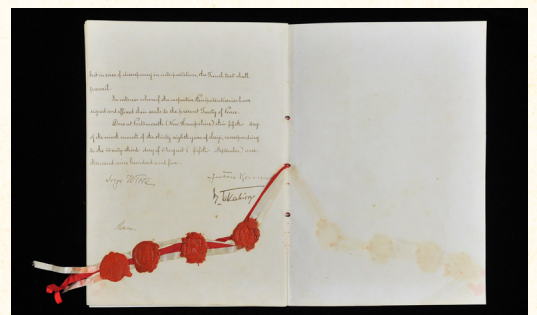
▶当会アドバイザー左より
富塚一彦氏・長友禎治氏・甲斐睦教氏



▶展示会場の様子



▶日露講和条約批准書（原本）



▶日露講和条約調印書（原本・署名部分）

展示会と冨塚一彦先生講演の感想

監事 吉田千草

国宝級の貴重な原本3点は、記念館中心にあります企画展示場所にガラス張りの中に置かれていました。その企画展示場所の外側に日南市（日南市教育委員会 佐藤智文先生（学芸員））制作の文章と写真でのパネルが13枚ほど展示されました。ポーツマス条約締結までの詳細が非常によくわかりますので、日南パネル2から8までを下記にご案内いたします。まるで映画のスクリーンを見ているような次から次へと小村さんの活躍に引き込まれてしまいました。

Q. なぜ小村寿太郎が首席全権になったの??

1905年当初、桂太郎首相は、枢密院議長であり4度の首相経験のある伊藤博文を首席全権とし、小村を帯同させる予定で天皇まで報告していたようだが、伊藤は政治的・一身上の都合ということでこれを受けなかったようである。結果的に外務大臣だった小村が首席となり、小村不在で空白になる外務大臣のポストを桂首相が臨時で兼任することになった。

【こぼれ話】

小村が日本を発つ時、次のようなやり取りがあったという。

井上薫（元老、元外務卿）

「君は気の毒な境遇に立った。今までの名声も、今度で覆されるかも知れない」

伊藤博文（元老、元首相）

「君が出発の日には、見送り人は山のごとくだらうから、我が輩は失敬するよ。その代わり帰りには他人がどうであろうと、我が輩が第一に横浜で出迎える。」

小村寿太郎（見送りの桂太郎に対して）

「帰ってくる時には、人気はまるで反対でしょう。」

【小村の覚悟】

講和会議で日本側の条件の全てが受け入れられることが困難なことは、最初から政府の誰もが分かっていたことであり帰国時に国民から非難を浴びること、さらには命の危険を覚悟で日本を発つのであった・・・。



7月 8日 横浜港からアメリカ客船「ミネソタ号」で出発

7月 20日 アメリカ西海岸のシアトルに到着

この日、ロシアの全権代表がウィッテであることを知る。

同日中にシアトルからニューヨークに向け急行列車で行く

7月 22日 ニューヨークに向かう途中の駅で5人の日本人に出会う

駅から20キロほど離れた所で「きこり」として働く男たちが、小村一行が通過するとの噂を聞いて夜中に歩いて会いに来た。継ぎ接ぎの手製の丸を掲げ、涙を流す男たちに会ったあと、小村は「アア、日本人だね・・・」と嘆息を吐いた。

7月 25日 ニューヨーク市対岸の駅に、高平小五郎（駐米公使）、竹下、埴原、内田定槌（さだつち ニューヨーク総領事）らが出迎えた、と日南パネル4には書いてありました。

ニューヨーク市対岸の駅はどこなのか調べましたら、ハドソン川の西、ニュージャージー州のホーボーケン駅か、その南にありますジャージシティ駅のどちらかという事が分かりましたが、どちらかは分かりませんでしたので、冨塚一彦先生にお聞きしましたら、小村全権一行の詳しい旅程までは存じ上げないのですが、出迎えた人々の一人である竹下勇は日記を残しており、その7月25日の記述には次のようになっています。

「午前早く Jessey City に赴き（おもむき）、9.25am 小村大臣の一行の着を迎（むか）ふ。同船してニューヨークに着。」とご教授くださいました。

で対岸の駅はジャージシティ駅で、船に乗り換えてニューヨークに到着しました。

7月 27日 高平と共にルーズベルト米大統領の別荘を訪問 別荘はニューヨーク州南東部に位置するロングアイランドのオイスター湾にあった。

【ポーツマスの舞台裏】

講和成立の立役者として欠かせない人物に金子堅太郎がいる。ロシアとの戦争が始まると、アメリカを味方につけたい日本は、ルーズベルトと面識のあった金子を渡米させ、全米各地での講演でアメリカ世論に日本の立場を訴えた。また、講和会議が始まって日露双方の意見が対立して会議が暗礁に乗り上がりそうになった時、ハーバード大学で一年先輩の小村の依頼を受け、ルーズベルトの援助を求め、講和の成立に貢献した。

8月 5日 日露両国全権がルーズベルト大統領に公式謁見する為に日本は米巡洋艦タコマ号、ロシアは同チャタヌーガ号にそれぞれ搭乗し、大統領の待つメイフラワー号に乗船した

8月 8日 ニューハンプシャー州ポーツマス市に到着

8月 9日 小村とウィッテによる非公式の予備会議が行われる

- 8月10日 本会議がこの日以降連日行われる
- 9月 5日 午後3時47分、講和条約に調印
「講和条約」「追加約款」「最終会議録」、それぞれ英語とフランス語の2カ国語で2通（日露両国分）作成された。
両国全権は合計12通に署名をすることになったが、小村はすべて新規のペンを使って署名をしたとのことである。
夜、ホテルにて招宴を開く。ロシア全権一行、各国新聞記者、一般滞在客を招待。午後11時頃、随員一同列車でポーツマスを発つ
- 9月 6日 ボストンを経由してニューヨークに到着
ボストンでは母校のハーバード大学を訪問するが、帰りに無蓋馬車で雨に打たれて発熱する。
- 9月 7日 ニューヨークの日本人会が開いた招宴に出席
- 9月 8日 フロックコートを着て胸を押さえ椅子に寄りかかり夜を明かす
体調が悪化するにもかかわらず、翌日の大統領訪問に備えていた様子が分かる。
- 9月 9日 オイスター湾の大統領別荘を訪問
韓国と満州での日本の立場を優位にするため、小村にとって日本の命運をかけた会談だった。
- 9月18日 シカゴでの医学会大会臨席のため渡米していた鈴木重道（海軍軍医総監）が小村を診察、快方に向かう
- 9月27日 特別列車でニューヨークを発つ
- 10月2日 カナダのバンクーバーから日本に向けて出港
エンプレス・オブ・インディア号に乗船し、船中で「満韓経営綱要」を考える。
- 10月14日 日露両君主、条約に批准完了
- 10月16日 講和条約公布。
小村一行、横浜に入港。
・停泊中の帝国艦隊、来航中の英国艦隊から19発の礼砲。
・長男の欣一、甥の川添三郎、小村俊三郎、従兄の小玉二平、伊東子爵家家扶の山之城軌（やものじょうわだち）が出迎える。
- 10月16日 宮城に参内
新橋駅から二頭立ての馬車で近衛騎兵一小隊の警護のもと参内、勅語を賜る。
- 11月 6日 特派全権大使として清国へ向け横須賀より軍艦満州で発つ
- 11月12日 北京に入る
- 12月22日 「満州に関する条約」調印
日露講和会議を超える22回にも及ぶ会議の末に調印。

ポーツマス条約締結後、賠償金を持ち帰らなかったことにより日本国民のひんしゆくを買い、日比谷焼打事件などの暴動を引き起こすことになった。しかし小村は言い訳することもなく、国民の非難を正面から受け止めた。

小村がアメリカに渡った目的は、講和条約を戦勝国として締結することの他、大陸政策を有利に進めるため、アメリカを味方に付けたいというねらいがあった。

そのため、条約調印後に体調を崩していたにも拘わらず大統領別荘を訪れ、韓国と満州における日本の権益が有利になるようルーズベルトに申し入れしており、ルーズベルトもそれを了承し、日米双方に利権を認めあう関係を築いていく。

帰国してから息つく暇なく清国に渡り、ポーツマス条約での決定事項を清国に認めさせるための交渉に臨んだ。ポーツマス以上に難航したが、満州に関する条約（北京条約）を結び、遼東半島の先端にある旅順と大連を租借地とすることに成功した。また、11月17日には第二次日韓条約が結ばれ、韓国が日本の保護国となっている。

日本外交史上多くの偉業を残した小村は、1911年（明治44）11月26日、政界引退後に住んだ神奈川県葉山町の自宅にて死去した。

以上、展示パネル（日南パネル2から8）でした。



11月23日冨塚一彦（日本外交文書編纂室室長）先生の講演は、小村さんが1884年外務省入所29歳から1911年病没56歳までを外交史料館が所蔵する史料をスクリーンに映しながら話してくださいました。その中で一番心に残っていますのが「外務省入所から翻訳局長の10年間は不遇の時代とされていますが、この間翻訳業務を行い、翻訳局長の時は世界中から届く文書に全て目を通さなければならぬ大変な仕事でしたが、不遇の時代が小村さんの下地になっていて、日清・日露戦争での対応、日英同盟締結、外相2回目の時には開国以来の不平等条約を完全改正、関税自主権を完全回復させ、関税率は小村さん自身が全部付けられたのでした。」というところです。

冨塚先生のお話をお聞きしまして、小村さんは早く亡くなりましたが、やらなければならない事を走り抜けてやり遂げ、近代国家の礎を作ってくださったと改めて実感しました。宮崎県の偉人で小村さんを超える方は、まだいらっしゃいません。



令和 6 年度日南市高校生海外短期語学研修派遣事業について

事務局長 金丸博司

当会事業の柱の一つとして今年も海外ホームステイに宮崎県立日南高等学校 2 年生の稲田陽仁（いなだはるひと）さんを学内選考して頂き、令和 6 年 8 月 8 日（木）から 21 日（水）までの 2 週間、米国ボストンとポーツマスへ語学研修に派遣しました。

8 月 8 日、日南市教育委員会の見送りで宮崎空港発羽田空港へ 14：10 着の稲田さんを昨年同様、添乗員の水谷さんと当会を代表して事務局長の金丸が出迎え、到着後すぐのリムジンバスで成田空港へ移動しました。稲田さんは北郷町の出身で、バスの中でこれからの 2 週間の貴重な時間を大いに満喫して来て貰うよう話し合いました。

成田空港では昨年同様、当会役員の石崎さん、松下さんが待っていてくれて出国の準備をしている中、ちょうどその時間に宮崎では日向灘地震が 16 時 42 分（日南市では震度 6 弱）発生し、心配でしたが、親御さんからの連絡で安心して成田を出発できました。日付変更線をまたぐ関係でボストン到着も 8 日のまるまる 24 時間後の成田出発時と同時刻の 18 時 25 分に到着となり、入国手続きに 1 時間半かかり、入国の目的や日数を聞かれたとのこと。ホストファミリー宅に 21 時頃に到着し、ホストマザーに温かく迎えられました。翌 9 日「TALK 英語学校」入学オリエンテーションを受けた後、地下鉄を利用してハーバード大学見学、ハーバード生が主催のキャンパスツアーと【ハーバード自然史博物館】見学がありましたが、同英語学校では、教室内の授業と教室外の授業が毎日のように組み込まれている授業スタイルとのことでした。

土曜は学校が休みで【Museum of Science】など見学、15日は学校でのレッスンの最終日で、最後に【修了証】授与と【最終スピーチ】も行ったそうです。最後の週末の土曜日に昨年同様「ポーツマス日帰り訪問」を実施。ボストンからバスで 1 時間 15 分かかったとのこと。【Portsmouth Historical Society】ポーツマス条約締結当時の映像も紹介、【John Paul Jones House】2階に「平和への誓い」という展示があり、ポーツマス条約締結までの流れをまとめていて、小村侯が実際に座った椅子が展示されている。小村侯と高平小五郎駐米公使がパレードした道「Market Square」を散策して美しい街並みを歩いたと話しをされていました。

20日成田到着後リムジンバスにて羽田へ移動、下笠会長と金丸が羽田空港にて出迎えました。

最後に稲田さんのレポートを掲載しました。



▶成田空港にて

日南市高校生海外短期派遣事業報告書

宮崎県立日南高等学校 2年 稲田 陽仁



▶羽田にて出迎え

まずはホームステイ先での生活についてです。初めての海外ということもあり、最初はかなり緊張していましたが、ホストファミリーのヴァネッサさんが暖かく出迎えてくれたので安心しました。お家の中も綺麗で、初日の夜はハンバーガーを作ってくれました。トークスクールに初めて行く際は目的地までの道をグーグルマップを使って丁寧に教えてくれました。私が、彼女が言っていることが分からないようなときは別の単語に言い換えたり、ゆっくり喋ってくれたり、とても優しく接してくれました。トークスクールに行くにはバスと地下鉄を乗り継がないといけませんが、自分はきちんと行けるかどうか不安でした。ですが最初の日はバス停までヴァネッサさんがついてきてくれて、チケットの使い方も教えてくれたので迷わずにトークスクールまで行くことができました。また、

毎日の朝食と夕食をホストファミリーと一緒に食べました。朝はベーグルにクリームチーズを塗って食べたり、ワッフルにメープルシロップをかけて食べたりな手軽に食べられるようなものが多かったです。夕食はピザやタンドリーチキン、豆の煮物などを食べました。ある時は庭のバーベキューグリルでチキンを焼いて食べたこともありました。まさにアメリカの食文化というイメージのある食事を体験できてとても嬉しかったです。そのうえ、全部の食事が美味しく、初めて口にするものばかりだったので自分にとって新鮮でした。ファミリーデーでは路上のフリーマーケットに行きました。たくさんのお店や、写真撮影、子どもたちが遊べるブースなどがありとても賑わっていました。私はホストファミリーのプロディ君に案内し



▶トークスクール修了証

てもらいながら、二人でアイスを食べたりバスケットボールをしたりしてコミュニケーションを取ることができたので嬉しかったです。

次にトークスクールについてです。私はアドバンスドクラスだったのですが、他の生徒さんはみな年上で、ペルーや韓国、イタリアなど多くの国籍の方がいました。授業の内容としては英語のラジオニュースやスピーチ、テキストを聞いて、そこで出てきた単語や熟語の意味や発音、用法を学ぶという形でした。知らない単語ばかりで自分のボキャブラリーの少なさを実感しま

した。音声の読み上げる速度が速くて最初は何を言っているのかまったく理解できませんでしたが、繰り返していくうちに少しずつ意味を拾って聞き取れるようになりました。自分のクラスは日本人の生徒が一人もいなかったのが英語に触れる時間をより増やすことができたことが良かったなと感じました。また、他の生徒さんと一緒にハーバード大学に行った際は、雰囲気や日本の大学とは全く異なっていたので驚きました。赤レンガ造りの建物が美しく、古い建物も残っていて歴史のある大学ということを実感しました。その後近

くの自然史博物館にも行き、アメリカの自然や昔の生活の歴史についても学ぶことができました。見たことのない生き物の剥製やサンプル、たくさんの鉱石が展示されていて、どれも興味深いものばかりでした。別の日には、また他の生徒さんとニューイングランド水族館に行きました。日本では見られないような海洋生物や淡水魚などを観察することができ、生態系を学ぶことができました。それぞれの生物の説明はもちろん

英語で書かれていたので、ポキャブラリーを増やすこともできました。

最後にポーツマス市訪問についてです。ボストンのサウスステーションからポーツマス市まではバスで1時間半ほどでつきました。自分は以前までポーツマス市がどんな場所か知らなかったのに到着して美しい港町を目の当たりにして驚きました。街を散策しながら資料館まで行き、そこでポーツマスの歴史に関するピ

デオを見ました。そのなかで小村寿太郎侯訪問の際の映像があり、ここまで古い映像が残っているほど歓迎されていたのだなと感じました。ジョン・ポール・ジョーンズハウスに向かう途中で、あるレストランを見つけました。その看板には「Nichinan」と書かれているのを見て姉妹都市である日南市とポーツマス市のつながりを最も実感できた瞬間となりました。ジョン・ポール・ジョーンズハウスでは実際に寿太郎侯が使ったペンや紙、椅子などが展示されており、当時の出来事について詳細な説明がありました。自分が初めて知ることばかりで、改めて寿太郎侯の偉大さを認識することができました。

私はこの海外短期派遣の経験をもとに、より見聞を広めて自分から学ぶ姿勢を大事にしながら日々の学校生活を送りたいと強く思います。



▶ポーツマス



▶小村侯が使用した椅子



▶ジョーンズハウス



▶自然史博物館

記念館も姉妹都市も

副会長 郡 司 聡 視

吉村昭が著した「ポーツマスの旗」は昭和54年に新潮社から出版されたが、実は講談社からのものも有る。

昭和62年に「海の史劇」と「ポーツマスの旗」とが合本された厚さのある1冊で「日本歴史文学館33」とある。新潮社版には著者の「あとがき」があり、講談社版には「著者インタビュー」がある。その中身はいずれも著述するに至る動機や経緯などが書かれている。執筆の取材で、彼の地のポーツマスにまで赴かれているが、勿論のこと飢肥にも訪問されていて、率直に感じた事が書かれていて面白い。同書の著述後談は、彼の別の本にもあり、「わたしの普段着」では（「正直」「誠」を買った小村寿太郎）と題されていて、また、「わたしの流儀」では冒頭に（「小村寿太郎の椅子」）の項目で書かれている。いずれも文庫本で短編のエッセイ集で読み易い。

昭和2年に東京の日暮里で生まれた吉村昭氏は、明治24年生まれの子が12歳の時に体験した「日比谷焼打事件」の事を何度も夕食後に聞かされた様だ。何度もなのは、おそらく晩酌をしてお酒が入っていたからだろう。人から聞いた話では無く、実体験だったからか、話は生々しく、そして具体的だったようだ。少年の目に焼きついた恐ろしい光景を語ったのだろう。そして帝都東京が初めて戒厳令がしかれるに至った騒擾事件の理由は、日本が大国ロシアとの戦争で連戦連勝して勝利したにも拘らず小村外相の屈辱外交でロシアに屈したからだと聞いていた様だ。父の言葉を聞いてうなずき、その後の教科書や歴史書にも同様の事が書かれていた為、少しも疑わずに小村を腰抜け外交官と位置付けしていたと、吉村氏みずからが語っている。ラジオもテレビも無く、情報源は新聞のみ。その新聞には連戦連勝とだけあり、それで部数も伸ばした。そして来るべき決戦の日本海海戦でロシア海軍の大艦隊を撃滅して完全勝利したとあれば民衆は勝利に酔ったのはうなずける。まさか新聞に「実はもう撃ち返す弾が無い」とか、「国家財政は底を付いている」とは書けないが、まったく戦争の実状は知らされていないのだから吉村氏の父を責める訳にはいかない。国民の殆どがそう考えたと思って良いだろう。その時も後にも、愚痴や言い訳を一言も発しない小村さん。遂には墓場まで持って行った小村さん。並の人の器を遥かに超えて凛々くさえ思えてしまう。

「海の史劇」は、ロシア海軍所属していて、日本海海戦にも臨んだ後に捕虜になった者が書いた詳細な日記や、ロシア海軍将校が記した航海日誌、ロシア側に残る公的記録書、報告書から書かれた史実小説である。いわばロシア海軍側から見た日露戦争記だが、吉村氏がその取材で史実を読み漁った後に小村の屈辱外交の定説は全く間違っているのを知ってしまった。

「海の史劇」を読んだ新潮社の出版部長の新田徹（ひろし）氏が、吉村氏の自宅を訪ねて来た。要件は小村寿太郎を素材に長編小説を書いて欲しいという依頼だった。新田氏もポーツマスでの交渉を”腰抜け外交官の屈辱外交”という認識を、本を読む前に持っていたのであろう。「条約締結の実情が今までの定説をくつがえすものですので、それを掘り

下げて書いていただきたいと思います」と、熱っぽい口調で言った。とある。(わたしの普段着 p161) 加えて吉村氏は、歴史は正しく後世に伝えておかなければならぬと考え執筆を決意した。と、ある。(同 p162) 著述の為、飢肥へ赴いた吉村氏は取材旅行を「異様なものであった」と書いた。歓迎されていない様子で、小説を書かれる事は郷土の恥を天下にさらすという意識があったようだ。「なにか卑屈な感じがしました」とさえ、講談社版ポーツマスの旗の著者インタビューに書かれている。(p578) 吉村氏自身も「海の史劇」を著述する前までは小村外交を屈辱外交と認識していたのだから、同書を未読の大多数も同様で、地元の飢肥の人の多くもそうであっただろうと想像できる。飢肥では殆ど何の成果もなかったが、小説執筆の為の調査で外務省の外交資料館にたびたび赴いて資料を閲覧した。米国ポーツマスにも赴き会議場であった建物にも行った。滞在中にアービング・リンツという96歳の長身で大柄な人と会った。条約の協議が行われた会議場の入口で衛兵を務めた方だった。

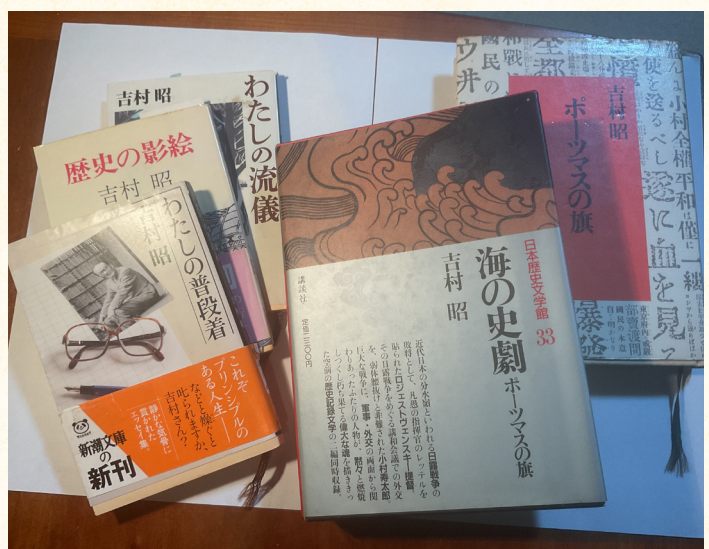
小村代表が会議場に入る時、銃を手に直立不動の姿勢をとった写真にもうつつているその人に、「ずいぶん小柄な人だと思ったでしょう」と尋ねると「そんな事はありません。堂々とした、いかにも一国を代表とした威厳にみちた方でした」と、答えたと書いている。(わたしの普段着 p164) ロシア側の会議の詳細な記録にも小村全権は終始冷静毅然としてロシア全権に対しており、その態度に敬意を払っていた事が記されている。史実の通り、条約交渉は軟弱でも腰抜けでもなく、全くその逆だった。書き上げた原稿に「ポーツマスの旗」と題して12月に出版されると、たちまち話題の本となり、2年後には全4回で成るドラマスペシャル「ポーツマスの旗」が12月に放映された。

その後、日南市では小村寿太郎が腰抜け外交官どころか日本の名外交官であったという認識が浸透し小村寿太郎記念館が建てられた。開館のこけら落しで吉村昭氏が招待され、講演もして頂いた。

講演後のお酒の席で、当時の河野礼三郎市長に「日南市とポーツマスと姉妹都市になったらどうですか」と言ったら、現実の物となった。(講談社版 著者インタビュー p578)

吉村昭氏が「海の史劇」を書かなかつたならば、「ポーツマスの旗」は生まれていない。

同書が無ければ、記念館も姉妹都市もなかつただろう。本を読まない人が増えている中、教科書での書かれ方が変わらない限り小村さんの偉業を伝えて行くのは難しい。せめて同郷人だけでも、困難な逆境に置かれても、ひるまずに毅然として国益を守った最強の外務大臣小村寿太郎を深く知って欲しいものである。



年間活動実施報告

当会年度は4月～次年3月までとなっていますが、年度にまたがった報告としています。

令和5年11月26日(日)	112回忌墓前祭 青山墓地 12:00より	参加人数 14名
12月2日(土)	「めざせ小村国際塾」生迎え入れ (6年生13名、引率2名の合計15名)	当会参加人数8名 参加人数6名
12月16日(土)	理事会	参加人数12名
//	役員忘年	参加人数6名
令和6年1月13日(土)	理事会	参加人数3名
1月23日(火)	海外研修報告会	当会参加人数3名
1月29日(月)	日南市役所より2名墓参	当会参加人数1名
1月30日(火)	葉山終焉の地訪問(角田宅)	参加人数7名
2月3日(土)	理事会	参加人数10名
//	役員新年会	参加人数14名
3月31日(日)	青山墓所清掃参拝	参加人数7名
4月27日(土)	理事会	参加人数13名
5月26日(日)	青山墓所清掃参拝	参加人数80人
6月9日(日)	総会 (内訳:本人出席21人、委任状出席59人)	
7月28日(日)	理事会	参加人数6名
//	青山墓所清掃参拝	参加人数9名
8月17日(土)	理事会	参加人数6名
9月29日(日)	青山墓所清掃参拝	参加人数13名
10月26日(土)	理事会	参加人数7名
11月23日(土)	「めざせ小村国際塾」生迎え入れ (6年生15名、引率2名の合計17名)	当会参加人数9名
11月26日(火)	113回忌墓前祭 青山墓地	参加人数16名
12月21日(土)	理事会	参加人数7名
//	役員忘年会	参加人数10名
令和7年1月12日(日)	理事会	参加人数8名
2月1日(土)	理事会	参加人数7名
//	役員新年会	参加人数10名



▶令和5年12月2日



▶令和6年11月23日



▶令和6年11月26日

小村侯青山墓所清掃参拝日のお知らせ

令和7年度の小村侯清掃参拝日程を次のように決定しました。
どうぞお気軽にご参加賜りますようお願い申し上げます。

第1回	5月25日(日)
第2回	7月27日(日)
ベル・リングング	9月5日(金)
第3回	9月28日(日)
第4回	命日 11月26日(水)
第5回	2026年 3月29日(日)

◆ 各日程内容

12:00	集合
場所	いとうや青山霊園茶屋
電話	03-3401-2475
	港区南青山2-15-20 赤坂消防署となり
12:00～	小村侯墓所清掃・参拝
13:30～	昼食・懇談会

今年度の総会は 6月8日(日) 14:00～ 両国2丁目会館を予定しています。

一般社団法人 小村寿太郎侯東京奉賛会

小村寿太郎 奉賛会

検索

〒130-0021 東京都墨田区緑3-9-3 電話 03-3846-9030 FAX 03-6659-3084

E-mail: kanemaru.hiroshi@orchid.plala.or.jp 発行: 一般社団法人 小村寿太郎侯東京奉賛会 発行日: 令和7年3月 発行責任者: 金丸博司

振込先: ゆうちょ銀行 店番 138 普通預金口座 1175855 名義 一般社団法人 小村寿太郎侯東京奉賛会



▲当会ホームページ
ぜひご覧ください。